

金子の思惑は当たった。大正八、九年の最盛期には、鈴木商店の取扱高は年間一六億円、三井をしのぐ勢いとなり、関係会社六〇余社、総資本金五億六〇〇万円と優に財閥の威容を備えるにいたったのである。

しかし、大戦終結後の大反動と、つづく関東大震災のショックは決定的だった。金子の死力を尽くしての工作も、所詮は数年の延命策でしかなかった。昭和二年の金融大恐慌は、この鈴木商店の破綻が引き金となった。

金子直吉は事業の鬼ではあったが、私心私欲なく、資性廉直な士であつた。金子の部屋二〇一号室には、日銀総裁の井上準之助や松方幸次郎などが集い、さながら政財界人のサロンの観を呈した。金子はVIPにありがちなわがままもなく、ボーイ達にも気をつかい、当時の従業員の誰に聞いても、顧客ナンバーワンに金子の名をあげ、「ほんとうに、よいお客さまでした」という。

鈴木商店はつぶれても、神戸製鋼所、帝人（現在のテイジン）、日商（現在の日商岩井）など、事業は残った。

そして金子は、事業とともに人材を世に送った。田宮嘉右衛門（神戸製鋼所社長）、依岡省輔（神戸製鋼所専務）、大屋晋三（帝人社長）、永井幸太郎（日商社長）、高畑誠一（日商会長）、賀集益蔵（三菱レーヨン社長）など、のちの財界を背負った人々は、金子に育てられ、金子に磨かれた人たちである。

日本ホテル(株)発行八十年史

「東京ステーションホテル物語」より

一九九五年十一月二日刊

が初めての「学校出」の社員ということでも、大体的見当はつく。それまでは、神戸、横浜などの外人商館あがりの番頭が店の働き手になっていた。

入社と同時に私は、当時神戸市生田区北野町にあった会社の独身寮に入った。この独身寮は元オリビアという名前のホテルだったのを鈴木が買い取ったものだ。そのころ鈴木商店の本店は、同じ生田区の栄町にあった。この本店へは寮から朝晩、歩いてかよった。当時は朝、昼、晩の三食とも本店で食べるようになっており、朝食は八時半までに本店に入らないと食べさせてもらえなかった。普通、寮から店までは歩くと二十分以上かかったが、朝はいつも十分そこでかけつけたものである。

当時、寮には二、三十人が住んでいたと思うが、寮住まいの者が交代で鈴木商店の主の鈴木よね宅に、宿直に行ったものである。当時、鈴木よね宅は、栄町の会社に近いところにあつた。私が鈴木に入社した年の六月末か七月の初めのことだと思ふ。鈴木よね宅へ入社後、初めて宿直に行った。その晩、型通りのことをすませて、寝室に引き揚げたところ、すでに蚊の出る季節なのに、蚊帳のしたくがなかった。私は蚊が大きらいだった。

私はそのとき「困るなあ」ぐらいのことを言ったのだろう。ところが、あとで聞いてみると、私が女中さんに強く文句を言ったというふうに鈴木家の人たち全員に伝わっていたらしい。「今度入った学校出の高畑という男はひどくうるさいやつだ」ということになっていったという。のちに私は、鈴木よねの孫娘の千代子と結婚することになるのだが、何回か鈴木家には宿直に行ったが、一度も顔を合わせたことはなかった。

私の履歴書

高畑 誠一

鈴木商店に入社 気難しい上司の下へ

「学校出の英語」信用されず



神戸高商の水島校長の勧めで、鈴木商店に入社したことは前にも触れた。水島校長は鈴木商店の一番頭の金子直吉さんと前から交際があつたらしい。その金子さんから「鈴木商店の貿易部門を拡大したいから、だれか適当な卒業生を紹介してほしい」と水島校長に頼まれていたようだ。

私は神戸高商在学中は、できれば三井物産に入りたいと考えていた。三井物産を志望したのは、当時貿易商社としては三井物産が抜きでた存在だったからで、どうせ働くなら一流のところがいいと考えたからに過ぎない。そんなわけで、三井物産志望といったところで、まだ漠然としたものだった。そんな状態のところへ、鈴木商店を紹介されたわけだ。尊敬する水島校長の推薦ということで、すぐに金子直吉さんの面接を受けた。金子さんからは、学校のことや郷里のことなどを簡単に聞かれた程度で、その場で採用が決まった。あっさりしたものだ。

私が入社した明治四十二年三月、当時の鈴木商店は、しょうのう、はっか、麦粉、外米、砂糖などを扱っている小さな貿易商だった。私は入社するとすぐに外国通信係として配属された。上司の通信係主任は、外人商館番頭出身の上田貢太郎さんという人だった。この上田さんは、号を観水といい、社内では観水さんといった方が通りがよかった。この観水という号は「何をくよくよ川端柳、水の流れを観てくらす」という端唄からとって付けたものだそうである。

観水などという名前からすると、さだめし粋でくだけた人のように思われるが、実際の観水さんは、大変な気難し屋だった。だからこの変人のもとで三ヶ月としんぼうしたものがいない、といわれたくらい気難しい人だったのである。ずっとあとで気がついたことだが、当時金子さんは初めての学校出として採用した私の人間をためすつもりで、いきなり鈴木商店でも一番気難しいといわれる観水さんのもとへ私を配属したのではないかと思う。

私の割り当てられた外国通信係というのは、海外の取り引き先との電信連絡の窓口の役割を果たしていた。当時、海外から入ってくる電文はほとんど英文だったが、これを翻訳し、社内各部署から出す電文の内容をチェックするというのが主な仕事だった。

私が英語を習い始めたのは、小学校一年生のころで、その後高商を卒業するまでの十七年間、他のどの学科よりも英語の勉強に力を入れてきた。それだけに鈴木商店に入社したときは、どんな英語でもすぐにこなせる自信を持っていた。しかし観水さんは「学校出の英語なんか」とばかりして、まともな仕事は私にさせてくれなかった。

金子さんのこと 生産部門にも進出

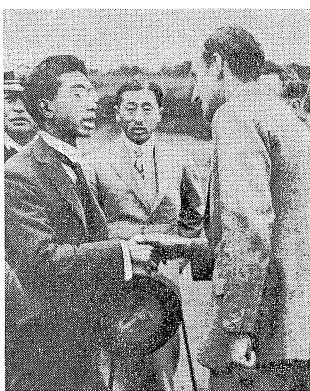
鈴木商店を大きく伸ばす

三井、三菱と天下を三分しよう——とは、今から考えてみても随分、

どえらい目標を掲げたものである。しかしわれわれ、当時の鈴木社員は、この金子さんの大号令に、まるで魔術にでもかかったように勇気付けられて突撃した。そして事実、第一次大戦後、成金時代の大正末期には、鈴木商店と鈴木グループは、三井、三菱と肩を並べるほどのコンツェルンになった。

金子直吉——この人の名前も鈴木商店の破たんとともに歴史のなかに埋もれ、忘れられてしまった。一介の砂糖商だった鈴木商店を三十年足らずの間に、日本を代表する企業集団のトップクラスに押し上げたのは金子さんの指導力によるものといっても過言ではない。金子さんの足どりが、そのまま鈴木商店の歴史ともいえるため、金子さんの足跡やその人となりについて、若干詳しく紹介してみたい。

金子さんが、鈴木商店に入ったのは、私が生まれる一年前の明治十九年、金子さんが二十一歳のときだといわれている。小学校も満足に出なかつた金子さんは、それまで郷里の土佐（高知県）で、質屋だとか、砂糖屋の丁稚や番頭をしていたが、志を立てて、神戸へ出てきたらしい。



当時摂政であられた昭和天皇(左)と筆者(中央)=アジントンゴルフ場

鈴木商店は明治十年ごろ、初代鈴木岩次郎が、奉公先から独立して

始めた。初代の鈴木岩次郎はなかなかやまっ気が多かつたとみえ、一時は砂糖のほか、石油、大豆油などにまで手を広げていたが、一向にもうからず、金子さんが入ったころは、主として砂糖だけを扱い、別に質

で小さな自家生産工場をいくつか造っていた。この大里製糖所は、原材料の原糖や石炭の輸送問題を考え、製糖工場としては我が国で初めて、臨海工場として造られたものとして注目される。製糖工場の位置、コスト低減の予見など、金子さんが、平凡な事業家でないことの片鱗をここでハッキリと示している。

事実、この大里製糖所は、製造コストが安かつたから、先発メーカーの大日本製糖を大いに苦しめた。大日本製糖は大里製糖所との競争に敗北し、工場の買収を申し入れてきた。鈴木商店ではこの申し入れに応じて、明治四十二年に六百万円で大里製糖所を売り渡している。この工場売却で鈴木はざつと四百万円、現在の物価に換算すると約四十億円ももうけた。この資金で、当時、鈴木が買収して間もない小林製鋼所（現在の神戸製鋼所）を大きくし、その後さらに帝国人造絹糸（現在の帝人）や豊年製油など実に五十以上もの生産会社を系列下につくさきっかけになったといえる。

鈴木店の精神 「鈴和会」、辰巳会に残る

昭和三十一年八月、東京・丸の内第一銀行（現在の第一勧業銀行）本店で、第一原子力産業グループ（FAPIGIIファースト・アトムミック・パワー・インダストリー・グループ）の結成式が行なわれた。このFAPIGIは鈴木商店の流れをくむ企業の親睦会の「鈴和会」が事実上の生みの親になっている。

昭和三十年の春のことだと思う。この鈴和会の例会の席上で、私は当時、神戸製鋼所の社長だった故浅田長平さんに「近い将来に必ず原子力時代がやってくる。旧鈴木商店の関係企業が力を合わせて、原子

屋に類似した金融に手を出していたようだ。

鈴木商店で金子さんは新しく、しょうのうを手掛け、鈴木がその後、外国貿易に乗り出すきっかけをつくった。私が鈴木に入社した当時、金子さんから「貿易を大々的にやるためにも、一時は英語の勉強をしてみたが、仕事の片手間ではうまくいくわけもない。むしろ基礎のできた「学校出」の人を採用した方がいいと思って、手始めに君を試してみたのだ」と言われていた。

金子さんが本領を発揮するようになったのは、初代鈴木岩次郎が明治二十七年に五十三歳で亡くなってからである。岩次郎の未亡人、よねさんから、兄弟番頭の柳田富士松さんと金子さんの二人が、鈴木商店の経営を全面的にまかされるようになった。以後、鈴木商店は、実質的にこの柳田、金子の二人のコンビで経営されることになるが、先輩格の柳田さんが女房役になって支えたことで、金子さんも思う存分活躍ができたわけである。

鈴木商店が大躍進のきっかけをつかんだのは、金子さんの着眼で、台湾のしょうのうを扱うようになってからである。金子さんの才気が、当時の台湾の後藤新平民政長官に認められ、明治二十二年に台湾のしょうのうが政府の専売制に切り替えられたとき、その六五%もの販売権が、鈴木商店にまかされた。これで、鈴木商店の扱い高が一気に膨れ上がるとともに、鈴木商店の世間に対する信用が高まったことが、その後の発展の基礎になった。

鈴木が単なる貿易商にとどまらず、生産部門に積極的に進出するようになったのも、金子さんの方針によるものだ。本格的な生産部門への進出の第一弾が、明治三十六年の大里製糖所（福岡県北九州市）の建設であった。もちろん鈴木商店では、それまでもしょうのうなど力問題と取り組むグループを結成しよう」と提案してみた。この私の考え方に浅田さんもすぐ賛成してくれ「原子力産業と取り組むためには、重電機メーカーの参加が不可欠だが、旧鈴木系には重電機メーカーはない。見渡したところ、旧財閥系以外でこれから協力を求められるのは旧古河系の富士電機製造しかない」と答えられた。

幸いなことに当時、富士電機製造の社長だった和田恒輔君と私は神戸高商時代の同級生で親友である。早速、この話を和田君にしたところ同意してくれた。最終的には旧古河系からは富士電機製造のほか、富士通信機製造（現在の富士通）、古河電気工業、古河鋳業、旭電化工業、日本軽金属、横浜護謨製造（現在の横浜ゴム）の計七社、旧川崎系から川崎重工業、川崎航空機工業（その後川崎重工業と合併）、川崎製鉄の三社、旧鈴木系からは神戸製鋼所と日商の二社が参加。それに旧古河、川崎、鈴木のみずれとも関係の深い第一銀行（その後日本勧業銀行と合併し第一勧業銀行に）、さらに第一銀行と緊密な関係にあった清水建設が参加して合計十四社でスタートした。結成して間もなく神戸工業（その後富士通と合併）、荏原製作所の二社も加入している。その後、このFAPIGIは英国のGEC（ゼネラル・エレクトリック・カンパニー）と提携し、我が国が初めて茨城県東海村に建設した原子力発電所に、コルダーホール改良型原子炉を納入している。

ところで、このFAPIGI発足のきっかけになった鈴和会は、旧鈴木系の企業の親睦組織だが、旧鈴木商店で働いた仲間で結成している個人の親睦団体としては「辰巳会」がある。鈴木商店は、商号をカネ辰といっていたことから命名したものだ。昭和三十一年にこの辰巳会の全国組織が結成され、その時以来、私がずっと会長を勤めている。

会員数約八百人で鈴木商店解散四十周年目の昭和四十三年には神戸市灘区篠原北町の祥龍寺境内に「供養塔」を建てた。

辰巳会では毎年春の総会のほか正月の新年会と秋の例会を開いている。この私の履歴書の連載が始まる直前の十月十二日に、関西地区の例会が宝塚であったが、百人以上も参加した。高齢者ぞろいだが、懐旧談に花を咲かせるだけではない。中国との国交回復後の世界情勢、日本の貿易のあり方など時事問題や将来への展望まで話題は豊富である。常に未来へ目を向ける姿勢——これが鈴木の大番頭だった故金子直吉さんに代表される「鈴木精神」といえるだろう。

話が前に戻るが、FAPIG結成の翌年の昭和三十三年から一年四ヶ月ほどの間、私は日本火災海上保険の社長を務めたことがある。いわゆるテーブルファイヤー（机上火災）事件の責任をとって同社の首脳陣が退陣したため、文字通りの「火消し役」社長として私が引つ張り出されたわけである。保険会社が架空の保険契約をつくり、火災に遭ったこととして、財源をねん出し、代理店へ割り増し手数料を支払っていたのが、テーブルファイヤーの実態である。たまたま大蔵省の特別検査で同社がヤリ玉にあがったが、同社に限った問題ではなかったのかも知れない。法律上は問題ではなかったのだが、道義上の責任を問われたわけだ。

もともと私は、ビジネスの上では日本火災海上とは関係はなかったが、同社の前身である日本火災の会長や社長を勤めたことのある川崎肇さんとはゴルフを通じて昵懇の間柄だった。この川崎さんに「名前を貸してくれるだけでいいから」と頼まれて、昭和九年に日本火災の監査役になった。その後昭和十四年からは、ごく短い期間を例外にすれば、ずっと同社の非常勤取締役として名を連ねていた。そんな関係

でリリーフ役の社長に引つ張り出されたのだが、会社へはほとんど顔を出さなかった。その後も昭和四十六年六月まで非常勤取締役としてとどまり、現在は監査役になっている。川崎さんからはゴルフで随分、チョコレートをちようだいしたから、そのお返しをさせてもらっていることになるのだろうか。

日本経済新聞社刊「私の履歴書」第四十八集より抜粋

昭和四十八年六月二十日発行



辰巳会大会記念 於京都(何有荘) 37.4.2.

辰巳会に思う

楠瀬 正明

辰巳会発足四十周年を迎えお目出とうございます。辰巳会発足の昭和三十五年当時を思い起こせば私事乍ら二月に父正一が亡くなり、続けて四月に経理担当の鬼塚様が突然逝去され、鈴木薄荷の経理関係者が不在となりました。そして簿記の講習会に通った事があるというだけの小生が経理を引き受ける事となり、六月決算八月税務申告を控えてのこと如何すればと困惑しました。しかし、今でも鮮明に記憶しておりますが太陽鉱工の山本幸男様には当時魚崎のお宅へ伺い色々とお話をいただき又日本樟腦の藤山様、寺西様外皆様方に大変お世話になり何とか申告書を提出することが出来ました。これも一重に鈴木商店関係者の連体意識、思い遣り、優しさの賜物と有難く思っております。その方々も今や鬼籍に入られてしまいました。

その様な事を思い出し出し出し乍ら四十年とは長い月日ですが過ぎれば短く感じられるものです。と言いますのも父正一始め中村勇吉様、小松彰男様の歴代社長も、そして小生も鈴木商店の薄荷事業に従事することが出来て四人とも五十年以上の間薄荷の香りを嗅ぎ続けて参ったからです。

小生の薄荷事業従事期間より十年以上も短いまだ四十周年の辰巳会ですが残念なことに会員が少なくなりつつあります。会員の構成等を猶一層考慮するかして鈴木商店の精神を汲む辰巳会を五十年・百年と続けることが出来ないものかと思いを巡らしつつ筆を置きます。

辰巳会よ永遠なれ!!